



畫道手引草

子 4
4176



門子
號 4176
卷

千歲流芳



早稻田大學
25.6.27
陸人 恭

千歳草

畫道手引草

此篇ヘン專蒙モハラ士シを導ミチビシの一端イツタンを示シメの既ステに業成ケタナリ下
 盛名セイメイ顯然ゼンゼン一イツ敢アス下議ギス所シヨ小コあふ近來シヤク若年ジュンの
 輩トモガ文人ブン画エのノ物モノなるトをシ知チらズばモろクにシ學マナ
 下シ計ケイをシはス是コト生計セイケイをシ得エるノ甚シ一
 きコト業ケをシ成ナらズとシ知チらズ因ユ今イマ爰ニ
 に世渡ヨワタもモ去クべク且カ又マタ後世コトノチに名ナをシも揚アゲべク一
 良工リヤウコウをシ仕立シタテたラ一方イツホウをシ示シメ願ネガハス學ガク者モノ此コノ后ノチより

流芳

進スまハ文人画をマナ学ブコ主功百倍ガイなりシウノ作ル其の
務ウツリ行ユクたまシあシえスに承平日久シヤウヘイヒヒサミうレ今世風奢靡シヤクチンに
うツりテ人心澆汚ケウハクに流ルる若年の輩トモカラこれに見カるハ
学問藝術を志スるといフとモ衣食玩弄クシロウの具ツに
役エキせシてハ下脩行ゲウキョウに洽チヤク切キョウなりシてハ藝事皆小成ヤスシ安
小コ々々自足ミツカラまりトなりシ且カ主業を售ウラむコトをシけル
に急イぎリなりシ是レをシてハ下業益卑ヒカ下カに就ツキきテ学問藝術
事成就の日ニなりシ一ツ恐オソハシてハ後來人物の凋零チヨウレイよりテ益ヒク

甚イしクなりシ今諸道イマハ主道ミチ々々の人トあままシバ
是レをシてハ主丹青イッの一途ト古人コジンの地位チイに至リ
名ナをシてハ後世傳マシへルべき学方マナヒ各條カクをシてハ舉示アゲしテ今志イマをシ
人ヒトをシてハ學マナヒ者シヤ此道コノミチよりテ歩ホをシてハ進スめテ薄俗ハクソク
の弊ヘイをシてハままぬらましんル
今爰イマにシてハ所トコロの數條スウをシてハ專モト々々画エをシてハ生業ナリワイ
とシてハ人ヒトのタメにシてハ論アゲずシてハ放ノけテいクにシてハ小
バニ世用ヨウとシてハ供キョウする者ハ画師エなりシ今世イマの好ヨミとシてハ應

流芳

ニ

るに^カと^クく。且^カ

御上家の御用なりと仰出の圖どモ

思召通^{トホリ}に圖を立^{タテ}事^{コト}は若^ニく^ハより画師^エなる者

の業^ノなり。されば画を業とする人ハ最^{サイ}初^{ハジメ}より

修行^{シュウギョウ}出^デ精^{セイ}しく。古代の紀金岡より住吉土佐の諸

名家狩野元信狩野守信が如く繪事を以

て名を^ナ方世^{カタヨ}傳^{ツト}ふべきの志^シを立^{タテ}て筆墨^{ヒツボク}を精鍊

して神妙^{シムカウ}の地^チに至^{いた}り

御上家の御用を初^{ハジメ}め万^{マン}の用^{ヨウ}に供^{キョウ}は^はるべきの備^{ソナ}へ

るべし^シ。然^{シカレ}ども心の至^{オキ}高^{トコロ}遠^{カウ}なるが故^ユに神妙^{シムカウ}の地^チ

に^ニ在^アり^タ。今^{イマ}探^ヒ函^{ツツ}常^{ジョウ}信^{シン}宗^{ソウ}達^{ダツ}光^{コウ}琳^{リン}が如^ニくの筆蹟^{ヒツセキ}

を^オも^スる^ル筆^{ヒツ}蹟^{セキ}甚^シ高^ク。言^{コト}骨^{ハネ}次^ジお^もふ^べく^ス。渾^{スベ}て

上^ウ代^ノの画^ガ筆^{ヒツ}象^{ゾウ}象^{ゾウ}高^{コウ}遠^{エン}にして各^{オノ}一^ノ種^ノの風^{フウ}格^{カク}あり。

後^{ノチ}世^ノの及^{およ}ぶ所^{トコロ}なり。主^ユに^ニ及^{およ}ぶ^ル系^{ケイ}と尋^{タズ}ふに古^コ人^ニハ

心地^{ココロ}勻^{ひと}しく高^{タカ}く。應^{オウ}永^{エイ}以^{ヨリ}來^リの名家^{メイカ}も亦^モ各^{オノ}凡^{ソボ}士^シと異^{コト}

なり。主人^{シヤウジン}往^{ムカ}て參^{サン}禪^{ゼン}して塵^{チン}念^{ネン}を一^{イツ}洗^{セン}して以^{ヨリ}

流芳

一
 凡境を脱せり。ま意筆墨の万とあるはまじし。一
 画者心地高きれば名画となりと能はざらん。一
 なる筆者の心凡下なるときハ所画の聖賢君
 子仙佛の像を面貌畫皆凡下なるされば學問
 一々心を高尚し凡下の情を一洗去べし且又古
 画に就て聖賢高致仙佛靈威嚴然とし可
 畏敬者を撰てこれを師とせべし古人所作大
 抵を宜きとありり後世の人凡下の心を以て

一
 隨妄に製する所の聖賢仙佛羅漢高僧の
 圖を面貌畫俗態特に威容なり。一紅毛流を
 離るるをりてハ鄙陋極る画者尤可慎
 朱子曰陽氣發る處金石畫くとほる精神一
 到らハ何事うかづらうしと又莊子に志を用い
 てまじるとときハ神に凝り云へりハ志だに
 一定し他事なけしハ藝道何事う成らざらん
 一む時名人の學を志を定て精習せざればなり。

流芳

古人曰 藝六即 道道 八即藝 サレハ先 中庸 首章 人意ニ 達シテ 志ヲ定 ムヘシ 小説 ノ類一 切読ム ベカラス

故に藝者學問一々畧道體に通一天地一
貫の真性に體一。無心中より流出する所必高
致あるべし。筆墨の工夫ハ和漢の名蹟を多臨
寫一々。筆小四勢あることを解得べし。又主濃
墨焦墨暈墨主濃淡深淺の宜きを審に
一々用墨の法をさしとるべし。又大小疎密高低
遠近位置宜しきものを熟読一々。圖を製する
の一助となすべし。人物を画くハ面貌秀異獸

類ハ毛骨隠起皮毛ノシタニ自ラ骨禽鳥ハ飛鳴翱翔山
水ハ巖壑函萃各古人の妙致を探り凡格を
脱ツキキヨ去キヨす。如此一々数十年を積ツムむ。必解悟
の時あるも天性テンセイ主才サイある者ハ神妙シムと云ふ人
一々能品ネヒン或逸品イツヒン各天工得トクる所の性を全
一々一代の作手サクシユと云ふべし。
凡筆に四勢シセイあり筋骨皮肉コツヒニク是なり。此四勢シセイ具
備ハレざれば画淺く一々圓混エンコンなるべし。古人嘗画

流芳

五

を評し、^{イキホヒ}勢脱^シが如しと。是^{コレ}筆に四勢あまじばなり。若^{モシ}筆と四勢無けまば活^{クワツ}没^{ハツ}の魂^{コン}心を託^{タシ}あまじなり。

一 凡^{オヨソ}藝事に法^{ホウ}則^{ソク}を立^{タツ}る助^{タツ}骨^{コツ}皮^ヒ肉^{ニク}の具^{ツグ}りくばる。そのなり。書画世に此四勢なくしてハ神妙能を畫^{ツク}さばまじま^ハ学^{ガク}画^ガ者^{シャ}書^{ホウ}法^{ホウ}を以^モて筆^{ヒツ}を執^{シツ}まば四^シ勢^{セツ}自^{オソカ}具^{ツグ}る古^コ人^{ジン}往^{ウツ}々^{ツツ}書^{ホウ}法^{ホウ}を以^モて画^ガを作^{ツク}ると論^{ロン}中^{チュウ}に見^ミえたり。画^ガ家^カ近^{キン}来^{ライ}寫^{シヤ}生^{セイ}を專^{セン}く

一 一^{ホロ}に^イ四^シ勢^{セツ}立^{タツ}る況^{ケイ}や骨^{コツ}力^{リキ}精^{セイ}神^{シン}を於^{オケ}てを心^{シン}凡^{ボン}境^{ケイ}を脱^{ダツ}せば画^ガ古^コ人^{ジン}を師^シとせば筆^{ヒツ}と四^シ勢^{セツ}が^カ志^シ分^{ブン}裂^{レツ}し^テ一^{イツ}なり是^{コレ}藝^イ事^ジ古^コに志^シあり。志^シある者^{モノ}冷^{レイ}く省^{セイ}察^{サツ}ありまじしなり。凡^{オヨソ}藝^イ事^ジ若^{ニシ}年^{ネン}より心^{シン}を一^{イツ}藝^イにこ^スり一心^{イツシン}不^フ礼^{レイ}に思^{オモヒ}を考^{コウ}し^テ一^{イツ}道^{ダウ}をき^キは^ヒら^ヒら^ヒと毛^{モウ}年^{ネン}四十を越^{コエ}べ^シル^ル多^タ年^{ネン}の脩^{シユ}行^{ギョウ}光^{クワウ}を發^{ハツ}し^テ上^{ウエ}一^{イツ}流^{リウ}賞^{シヤウ}美^{メイ}す^ルに^シて^ハ先^{セン}輩^{ハイ}名^{メイ}譽^ヨを

流芳

一人を足て去るべし。探函齋の才筆を以て一家の體を成が如きも、初の程いさばうれ名画とぞ人知るべし。よりの大雅無村かども、年四十を越て人初て是を賞せりと。あやきは皆藝道を脩るにほ切りて、強て售らむとを求めば、又一毫も世に媚るの心なく、各を心操を全うせしれし。近付ハ最初より画筆を以て金錢を釣る急なる藝

事は是が爲に枯落に歎らばまことなり

一 今時賢徳技藝主人あまをしましうべ、凋衰の甚しき奢靡志しむれば、拔羣寡欲の君子、時弊を矯るを志とすべし。さらすべし、賢徳いさむる、藝道は下り行と水の下流、就が如し

一 今時心地を論る人なり、是を知らず、時と賢徳の入り、技藝を主人なり、これより、
流芳

夫心ハ根本ナリ。根本を培養せざれば、枝葉の茂盛を願ふ豈に理ありや。明者亦くおそふべきことなり。

一 夫繪画ハ黄帝の臣史皇造。然して殷周より漢に、よろまらず、数千年の間、惟物の形象を圖し、世に傳ふものも、古廟石室の中、亦画古賢の像尤多し。書契以來、忠臣孝子、貞婦、孔子及七十二人の形像、或ハ君臣官屬、龜龍麟鳳

之文、飛禽走獸の象を画けり。皆是画工の職なり。画は筆法の論なり。固く、以て鑑戒とあるものも、呉曹弗興に、之を始り、良工の名あり。至後、晋顧愷之、宋陸探微、梁張僧繇、唐吳道玄、これより、天下の能事畢す。世にこれ画の四祖と稱はる。其餘、晋衛協、隋展子虔、唐阎立德、阎立本、周昉、盧稜伽、楊庭光、皆是妙手神品。又曹霸、韓幹ハ画馬に長し。李、子訓、父

流芳

子ハ山水に長ク、主、後、宋、趙、伯、駒、伯、驩、皆、丹青、
妙、を、得、り、院、體、の、諸、人、主、名、著、顯、也、
者、ハ、李、唐、張、敦、禮、劉、松、年、馬、遠、夏、珪、梁、楷、
馬、和、之、武、洞、清、是、也、流、派、を、襲、者、蕭、照、毛、
益、顧、興、喬、元、則、顏、秋、月、明、
則、戴、文、進、吳、小、
仙、以下、周、臣、張、路、陳、子、和、
一、画、龍、宋、董、羽、及、陳、所、翁、共、
極、神、妙、花、鳥、
唐、
邊、鸞、始、了、妙、品、
了、主、後、南、唐、徐、熙、後、蜀、

黄筌各成一家、宋、黄、居、寀、徐、崇、嗣、徐、崇、勳、俱、能、
傳、家、学、又、趙、昌、善、寫、生、元、錢、舜、舉、師、之、法、又、王、翬、
法、黄、筌、明、沈、石、田、
宗、徐、熙、至、清、古、法、亡、
唐、時、始、了、画、
南、北、二、宗、を、分、つ、北、宗、
則、李、思、訓、
父、子、著、色、山、水、流、傳、
了、
宋、
趙、幹、趙、伯、駒、伯、驩、と、
か、り、
以、
馬、遠、夏、珪、輩、に、
い、
る、
余、お、そ、へ、り、
獨、山、水、の、
二、派、あ、る、に、あ、る、
凡、人、物、
花、鳥、走、獸、の、類、皆、分、了、
二、派、と、
あ、る、
蓋、顧、陸、張、
流、芳、
九

展の流文人宗一然一吳道玄の一派傳へて成
画家者流

書畫同法

上古蒼頡製字書畫同體書法畫法無二
唐張彦遠論顧陸張吳用筆曰顧愷之の筆跡ハ
緊勁聯綿循環風の趨り雷の疾如こして言常
に筆の先あり画終る意在とて一筆意の
勢一々如亦毛心行りて精神の全きなり

漢の張芝と云人の古今一人の草書の名人なり一筆書
と云てを初てきりて一筆一筆と云て
けり等脈連りつぎに體勢一筆一筆成る陸
探微も六一筆画と云てを創らて人物の衣紋を
一筆に書きはけらてはたす於是書畫の筆使い同
きことをしるる陸探微ハ六朝の宋代の人なり一筆
法精く一利潤多々媚い新奇妙絶なるもて時輩
及ぶ者なりとて又梁張僧繇ハ衛夫人の筆陣の
流芳

圖といふ書法によりて、イッテンイックワタクミ 一點一畫巧をツク 奏し、クフウ 工夫
せしれり。主筆勢鈞戟利劍の森々と立つるタテ 祓た
る如しと云へり。唐の吳道玄といふてハ天性神妙の手
小し古今一人なり。物を画くこゝ象似といふは凡俗を
脱落せり。前輩及オヨフ 今にセ 世にコレ 是をシ 画聖と稱は
し。樓閣など画くに界筆直尺を用はず。佛像の
圓光一筆こゝれと云ふ。是も弱年のジヤクシ 寸張旭に書
法傳受をテシ 得てシ 工夫せしれたるなり。今ハ名家

の筆法皆書法中より来るとを

古圖存鑑戒

古人所畫周易圖、毛詩圖、春秋圖、孝經圖、職貢
圖、十八学士圖、忠孝圖、烈女圖、凌烟閣功臣圖、名
將、画像、古君臣圖、漢名臣画像、聖賢仙佛羅漢等
圖多し

顧愷之曰、画人最難、次山水、次狗馬、臺榭、一定器
耳、故後人シ 次ニ 以ス 花鳥、蟲魚

流芳

眼睛

顧愷之の人物を画ける。毎年目精をいせられ
ぬとあう人主故を問ふに。答曰形貌のよあ
し。妙處に瀕ることなく。こも目精の入やうあ
き。時ハ熱顔とす。故に尤等かよき。時を待て目
精を點すと云。張僧繇於金陵安樂寺画四龍。主目精を點せ。毎
に自尔これを點する時ハ飛去らむと。人と皆信せ。然

固く目精を點せんことを請く。巴を内二龍
の眼睛をへらま。一ろ。志づく。一。雷電興り。二
龍破壁飛去り。一とや。一。人。一。眼睛ハ画家
の一大緊要尤心を。用伸へま。一。處か。一。を。

衣紋

宋郭若虚曰。画衣紋に重大。一。調暢なるもの。有
鎮細。一。勁健なるもの。有。勾。一。綽。一。も。縦。一。な。

流芳

も制手もこびりこびり必理こふあやうにさき
ちう高きそ側も深き所斜なる小巻るさけり
いとこも風吹くバ飄り興るの勢を状とす
古人云顧愷之描法ハ春の翠の綵を吐きいぶたが如し
又春雲の大空に浮き流水の地上をながる如し
又曹弗興が衣紋ハ人の水中より出る如し
ほまゝ吳道子が衣紋ハ人の風中に立てたる如く衣
帯吹れいぶるさまなり故に曹衣出水吳帯

當風と云。宋李龍眠倣古法之筆雲行水流るが如
し

白描

明何良俊曰白描ニ種あり。趙松雪ハ李龍眠より
出。李龍眠ハ顧愷之より出。此ハ申鐵線描也
馬和之馬遠則吳道子より出。此ハゆる蘭
葉描也

流芳

人物描法十九種

- 高古遊絲描 カウコ ユウシベウ
 - 行雲流水描 カウウン リウスイ
 - 混描 コン
 - 蚯蚓描 キウイ
 - 折蘆描 セツロ
 - 戰筆水絃描 センヒツ スイモン
 - 蘭葉描 ランエフ
 - 琴絃描 キンゲン
 - 馬蝗描 ハクワ
 - 振頭釘描 ケツトウテイ
 - 棗核描 ソウカク
 - 柳葉描 リウエフ
 - 枯柴描 コサイ
 - 鐵線描 テツ
 - 釘頭鼠尾描 テイトウソビ
 - 曹衣描 ソウエ
 - 橄欖描 カラン
 - 竹葉描 チクエフ
 - 減筆描 ゲンヒツ
- 明汪阿玉曰馬蝗一名蘭葉描或曰柳葉即蘭葉描
恐皆非也

人物描法凡十九種余已刻主圖因丁審に點檢するに
 我近古應永の頃より世に流行し來る所の北宗の一派に
 傳るその大半は屬に主徒宋画と稱するは亘たつ今主
 源流を三ノ畧傳來より所を擧げ文人者流画家者
 流西派ニ分るの根元を示さむとて遊絲鐵線曹衣出
 水行雲流水の渚描ハ尤是古法トナリ文人家宗之折
 蘆竹葉蘭葉釘頭古柴減筆戰筆水紋渚描ハ唐
 吳道玄の一派草創する所なり了画家者流傳レラ

流芳

文人ハ多クハ宋李龍眠詳顧陸張展の筆法自
成一家體裁遊絲鐵線二描を以て白描の人物を
作稱し宋画第一と云大率盈尺の小幅或ハ長
卷にテ大作ハ絶ナリ。主流風をほぐ者ハ元趙松
雪明文徵明是也。唐寅仇英亦鐵線描を用申。然
一清ニ至テ古法亡。我近古傳所の北宗の描法
探画齋一家の體裁を創して一世を睥睨
せしれしより描法や寝トテ古氣亡。志達

と云主餘習於末流。傳大明和天明の間にして
画者各競テ一家の體裁をなせり。於是何描
と云知ぐべきものあり。西土も亦元明以來
諸描錯亂し何描と云名付知ぐべき物
あり。往し釘頭鼠尾馬蝗柳葉お雜へて衣摺
をなす。古法の世に傳るべからず。仲く
實に惜へし。

畫則

水墨 スイボク 墨畫也

大着色 ダイキヤクシヨク 極彩色

着色 シヤクシヨク 中彩色

淡彩 タンサイ 薄彩色

淺絳色 センカウシヨク 如黄子久 赭石輕施

白描 ハクベウ 如李伯時 墨王カキノミニ 土佐家白画ト云

吳裝 ゴソウ 吳道子がウス彩色ノ衣紋ノキハニサツク色ヲ施スルヲ探函齋ガ

大青綠 ダイセイリョク

青綠

淡青綠

金碧 キンヘキ 唐李將軍ヨリ初テ此法アリ金泥ニテ青綠

山水ノ骨カキ紋ヲクルナリ

没骨 モツコツ 宋徐崇嗣初画キ出セリ骨ガキナシ彩色式ハ淡墨ニテ花ヲカク今云ツクダテシ

可心得 諸件

余按曹弗興顧愷之陸探微張僧繇立本諸公

畫皆遊絲鐵線之類細筆描寫ハ唐吳道玄至

一壁上の大作尤多一初テ重大の描法あり所謂釘

頭折蘆戰筆水紋の諸描法是ナリ此一派傳ハ

畫家者流ト云々古昔我皇國に傳ハ不の画法

紀金岡以来土佐家ニ云々蓋晉唐間細

筆の體を傳へ應永以来雪舟狩野氏などの

流芳

所画ハ蓋吳道玄の一派を傳ふ

一 凡以画一家を成むとある者心得あり能古今時代を考へて圖を製まべし又時風合ぬ事人の忌嫌を去るべし筆法ハ古法に随いて圖様を新し以て俗習を一洗まべし漢土六朝より唐宋と多し名家の所画佛像羅漢ホの圖多し元明に及び漸火なり古ハ和漢多し長卷を製る而今人不好し

一 下掛幅を好む如けの類時好むをむくを得ん然ども又俗情におと移り俗境に流るる必見識あり画法筆法皆古則に随いて圖様の陳腐を去り以て主功をまべし

一 圖様陳腐を去るといたし竹林七賢圖高山四皓圖のよき狩野氏画き来る亦多し徘徊顧盼の象をなせり若四皓を製せ石に坐し樹に倚り把卷談道の象を寫し七賢のよき飲酒談笑し彈琴賦詩

流芳

逍遙間雅の趣を寫す意新しく功ありと云。又蓬萊仙山の圖の如き古より画き来り亦逸宦松竹梅盆石の象をばんとしに伸る寫其堂なり。本是海中の仙山を云り。是は寫中なる百花百禽人物樓臺など画くと可也。如此の類々をみるべし。但し無学の人私に想像し一圖を製するハ不可なり。必書中撮る所あり。

一 襖屏風張付の類狩野氏及長谷川流能是に勝へ

たり。是は吳道子が大筆の一派を酌めたり。我朝家の容儀を寫すと土佐家尤佳なり。是を搢紳に周旋し、朝夕目の觸る不言中に記すべし。

一 西土ハ明以上を取るべし。我近世の画ハ古法なきもの

一 清人画人物擬陳洪授者往々あり。洪授の為人豪爽所画の人物も亦豪爽なり。洪授は不可なり。

世人マニバ学ラコト殊ウキフイウ大幽簡シ清雅セイガの致チ

古人曰コト画人物者ラモノ相法ワウホウ通ツウ之ニ一ニ是又少シ心ココロ得トク

至マデ一ニ南極老人ナンキョクロジンなど画エまシくニ貧相ヒンサウなるニ忠臣武將チュウシンブシヤウを画エ

まシくニ悪相アクサウなるニ一ニ本ホンをエりテ又マタ

一 皇朝の官女コウテウノクワンニョ額ヒタビせまくニ一ニ下豊西土シモトヨシニツチの婦女メノメノ額ヒタビ廣ヒロクくニ頤イ

細ホソク一ニ此等コノトウのヒタビをエりテ一ニ

一 昔ムネより画エ空事ソラコトとシてモありシ此画コノエ空ソラとシてモならばモ画エ

に味アジならばモ生ナマの物モノをエりテましましにモましるニましるニ心ココロ申マシりテ且カッ

俗ソクなりシ徐熙シヨキ物をウタ寫シにモ物象モノカサキをシてモ類ルイせられルもシ又マタ意ココロ是ナリテ

一 顔カン色シヨクのニタレ似ニをシてモ未ミだラしテもシりテ能ヨク此コノ意ココロをシてモ解カイせられル画エ

一 花ハナをシてモ寫シるニ過スむニ余ヨレおしるニ寫シるニ意ココロをシてモ

寫シるニ一ニ形カタ色シヨクにシてモ花ハナをシてモ寫シるニ一ニ

來キりテ寫シるニ地チ上ジヤウにシてモ寫シるニ一ニ龍リウをシてモ

鳥トリをシてモ寫シるニ枝エダ上ジヤウにシてモ寫シるニ一ニ或シハソラ空ソラ

をシてモ寫シるニ一ニ勢セキをシてモ寫シるニ一ニ毛モウ色シヨクをシてモ寫シるニ一ニ

飛鳴ヒメイ翺翺カウシヤウ活潑カツツツをシてモ寫シるニ一ニ功コウをシてモ寫シるニ一ニ象シヤウをシてモ寫シるニ一ニ倍ハイせられル

流芳

一 古人曰画を学ぶ者邪甜俗頼の四病を去べし。邪ハ異風、甜ハ柔美、俗ハ市塵の俗、頼ハ摹本に頼らるる。筆のけしきなきなり。

成家

一 凡画を以て一家を成むと思ふ人ハ南北和漢合習し、弘く求め深く探り、諸家の長を集り自家の有と有り、八面玲瓏融通自在なり。

ナニヲカキテモミユトニカクモナク

夫畫道の興、晉より唐宋に盛なり。然し、王大家名流と稱する者多し。貴戚宗臣朝家官人より、晉顧愷之ハ散騎常侍、梁張僧繇ハ右軍將軍、吳興太守、唐阎立德ハ工部尚書、立本ハ右相、封文貞公、李子訓ハ左武衛大將軍、封彭國公、宋趙千里ハ宗室、より官浙東路鈐轄、弟伯驥ハ和州防禦使なり。然し、王所画後世画工の業に異なり。往々於寺院壁上画く所、聖賢仙佛羅漢、及龍水の類なり。獨吳道玄、韓幹、昇賤より出づ。以上の諸名公、王画

流芳

風所好大槩お同下固より文人画工の多なり獨王右丞
小玉て初て文人遊戯の道を開けり是より一々南北兩
派となり右の如く晉唐の名蹟ハ貴人高官の人のなりごと
がよきまじハ品致南宗に劣まるとせば後世此技工人に落
いり故に主品致大下まじりて我上代晉唐の画風
を傳へて主名顯赫し者ハ百濟河成巨勢金岡土佐家の
諸人皆是

皇朝の官人より河成ハもと武猛小弓の達人より

志をせり主人凡士にあはるることを知るべし故に少年
画志者此を以て生業を計るとそ心を高尚の地に
まじりしハ名画とたうることを能くすることを知るべし

右條々所説為初学開一條之正路学者
因之進則莫墜邪魔之境

隱士沖澹述

流芳

二十一



Handwritten text in a cursive script, possibly a list or notes, located in the upper right section of the page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a list or notes, located in the lower right section of the page.

